

報 告

学生団体による高専間交流の現状と意義 —長岡高専インターアクトと沖縄高専WSBとの交流—

佐藤 公俊¹・吉川 友子²・野口 一英³・羽賀 亮介⁴

¹一般教育科—社会 (Liberal Arts-Social Sciences, Nagaoka National College of Technology)

² 国立高等専門学校機構留学生交流促進センター (Center for International Student Exchange, Institute of National Colleges of Technology, in Okinawa National College of Technology)

³ 機械工学科 (Department of Mechanical Engineering, Nagaoka National College of Technology)

⁴ 地球ラボ (Chikyu-Lab., Nagaoka National College of Technology)

Current Status and Significance of National College of Technology Exchanges between Students Groups

- Interactions between Nagaoka National College of Technology and Okinawa National
College of Technology -

Kimitoshi SATOH¹, Tomoko YOSHIKAWA², Kazuhide NOGUTI³ and Rio HAGA⁴

要旨

本稿は、長岡高専インターアクトクラブと沖縄高専 WSB とのお互いの地域を行き来しての文化・世代・国際交流を紹介し、その意義と課題を検討した。長岡高専インターアクトクラブは、1965年に長岡ロータリークラブの認証による創設され、それ以来の福祉施設の双葉寮訪問などの社会貢献活動と、この20年来、スキー研修、バーベキュー、長岡大花火見物、餅つきなど本校や他校の留学生との文化・国際交流活動を行ってきた。メンバーは多数の留学生を含めて40人前後である。沖縄高専国際交流委員会 WSB は、2010年4月に顧問が全沖縄高専生に呼びかけて集まったうちの2名を発起人として同好会設立を届け出た。6月からは週1回の定例会活動を始め、7月には沖縄高専初の留学生歓迎会などの行事を実施した。メンバーは留学生を含めて平成24年5月現在で31人である。2011年3月から長岡高専インターアクトクラブと沖縄高専 WSB とは、3月の国際交流スキー研修と9月の沖縄交流平和研修で、お互いに行き来してのホームアンドアウェイの遠隔地間の交流をし、留学生とロータリアンも交えての多文化・多世代交流を始めた。これらの行事の実施に当たり、国際ロータリー第2560地区ガバナー、第2580地区ガバナー、長岡ロータリークラブ、那覇ロータリークラブ、那覇西ロータリークラブから様々な形で大きな支援を受けたことに感謝したい。

Key Words : interactions, student groups, interact club, World Student Bridge

1. はじめに

高専における国際交流活動は、各校の試みや努力

により着実に実績を積み上げてきている。例えば、長岡高専の地球ラボの設置と学生の国際交流活動があげられる (<http://chikyulab.nagaoka-ct.ac.jp/>)。こ

のような国際交流や隣接地域の高専間交流の例は多く見られるが、高専の学生団体による遠隔地域間文化交流と国際交流および多世代交流を併せもつ多元的交流の例はあまり見られず、研究も本稿の共著者の吉川と佐藤による平成 24 年度高専フォーラムにおける報告を除いてはほとんどないと思われる^り。

本稿は長岡高専と沖縄高専という異なる地域の高専の学生間の多文化・国際交流の現状を報告し、交流の目的としての多文化／異文化／多世代交流による意欲／意識／価値／視野／世界の拡大と、相互理解からの平和意識の形成と共有も視野に入れ、教育効果などの意義を検討する。

筆者らが活動を支援している、長岡高専インターアクトクラブと沖縄高専国際交流委員会（World Student Bridge: WSB：通称ワサビ）とは、学外での社会奉仕活動、学内外の留学生との国際交流活動を行っている。両学生団体は合同で、冬のスキー場と夏の沖縄での多文化・国際交流研修を企画・実施している。本稿では、この多文化・国際交流活動を紹介し、学生の多文化間相互理解による人間的成長やコミュニケーション能力の高まり、平和への意識の形成と共有について報告する。

筆者らは、本稿以外でも、こうした活動を報告会で取り上げ、学生とともに検討する機会を持つ予定である。そして多文化・国際交流の意義を掘り下げ、学生団体活動の改善策を共有した成果報告書を作成する。こうして来年度以降も、学生による企画実施・研究報告・協働での評価改善のサイクルの継続を支援してゆきたい。

2. 長岡高専インターアクトクラブの活動

長岡高専インターアクトクラブは、長岡ロータリークラブの認証のもとに 1965 年に国際交流と地域貢献を目的として設立され、長年にわたり積極的に活動している。例年の行事予定では、5 月の連休明けには新入生と留学生歓迎のバーベキューを行い、8 月の長岡花火大会は留学生と一緒に見物し、11 月の学園祭では外国料理の屋台など異文化体験交流を企画し実施する。また、毎月長岡市の児童保護施設の双葉寮を訪問して、入所の子どもたちと遊んだり、勉強を見たりしている。個人の判断で NPO 法人 UNE で福祉園芸活動に参加する者もいる。

長岡高専インターアクトクラブは、毎年 12 月に冬季交流研修を、3 月に春季交流研修を行っている。

例えば、2010 年 12 月 26 日～28 日、妙高青少年自然の家と杉の原スキー場で実施した冬季交流研修には、高専生や高専卒業生のマレーシア人 14 人、ヴェトナム人 11 人、バングラデシュ人 1 人、ガボン人 1 人、オーストラリア人 1 人、日本人 18 人が参加し、多国籍グループでスキーやスノーボード、交流会、清掃チャレンジなどを楽しんだ。

そして、インターアクトクラブが 2011 年 3 月に行ったスキー・スノーボード春季交流研修への沖縄高専生の参加が大きなきっかけとなり、後述するように、2011 年 9 月から沖縄研修旅行として、遠隔地同士の地域文化交流と国際交流および、平和交流を目的とする、多文化交流を行うようになったのである。

長岡地域でインターアクトのような学生団体が活発に活動できる要因として、長岡高専が早い時期から国際化に力を入れて取り組んできたこと、および、ボランティア団体の支援活動が挙げられる。長岡高専では国際交流推進センターを置き、「地球ラボ」という国際交流の拠点施設がある。また、「地球ラボ」は長岡市民センター内の「地球ひろば」とも協力関係にあり、地域ぐるみで国際的な活動を進めている長岡市に立地する利点がある。これに加えて、「雪つばきの会」という学外団体ではあるが現職・退職の教職員のボランティア団体があり、秋には留学生と梨狩りに行き、冬には卒業する 5 年の留学生送別の餅つき会を実施するなど、活発に留学生支援を行っている。

3. 沖縄高専 WSB の設立と多文化交流を目的とした高専生の課外活動

沖縄高専で国際交流の学生団体を立ち上げたのは、筆者の一人の吉川が茨城高専の国際交流クラブを見学したことがきっかけである。同時期に長岡高専も訪問し、長岡高専には長く実績を積み重ねているインターアクトクラブがあることもわかっていた。

全国高専の留学生・国際交流担当者のメイリングリストを利用して 2010 年 11 月に問い合わせた結果、この 3 校以外にも国際交流を目的とする学生の課外活動団体を知ることとなった。富山高専には国際交流ゼミ同好会があり、テレビ会議による英国の学校との交流や地域の小学校の国際交流の支援活動をしていることがわかった。また、木更津高専では、受け入れ留学生との交流を含む異文化学習を目的とす

る地中海研究同好会の設立準備中であった（同会は平成24年度4月設立）。

以上の5校以外の高専でも、寮において寮生と留学生との交流会を持つなど、学校行事に留学生交流を取り入れている高専は少なくない。しかし、その多くは1年に1回程度の頻度でしか行われておらず、日常的な交流活動には発展しにくいように思われる。

横田・白玉²⁾が指摘しているように、他文化を理解し尊重する態度を培うことが高等教育機関の重要課題のひとつである。キャンパスの多数派である日本人高専生と留学生との交流を日常レベルで進め、さらに他地域の他高専との交流をも進められれば、外界と隔たりがちなキャンパスだけでは知り得なかった経験を得られるのではないだろうか。日常的な参加度を高めるためには、課外活動という活動形式を取り入れることが有効であると思われる。

4. 沖縄の学生団体と活動の概要：沖縄高専「国際交流委員会（WSB）」

2009年10月から2010年2月にかけて国際交流サークル設立企画書を作成して事務的な調整をした上で2010年4月に全沖縄高専生に呼びかけたところ、数人が集まり、そのうち2名を発起人として同好会設立を教務係に届け出た。6月からは週1回の定例会活動を始め、7月には沖縄高専初の留学生歓迎会を実現した。これを機にメンバーが増え留学生を含めて28人となり、2012年5月現在では31人である。

出発点は顧問教員の企画書であるが、顧問教員の狙いは、場所ときっかけを与えることのみであった。ある程度の環境を作って意欲のある学生を集めれば、後は学生の自主的な活動にまかせようと考えた。

期待どおり、定例会では多様なアイデアが出された。団体組織は「委員会」とし、他との兼部ができるようにした。英語名称を顧問の助言を交えて考え、「World Student Bridge」とし、頭文字のWSBから「わさび」という愛称で団体を呼ぶことが決められた。活動内容は、外国文化行事や留学に関する情報発信、および、留学生との交流とされた。学生会との協力も重視した。キャンパスの外との交流は今後の課題である。

今年度平成24年度のWSBの活動計画はつぎのとおりである。

4月	部活紹介 留学生歓迎会
5月	辺野古バーベキュー
6月	異文化交流マイナースポーツ大会(仮称)
7月	留学生交流会（お茶会）
9月	長岡高専 訪沖
10月	ハロウィン
11月	高専祭
12月	クリスマス
1月	多文化交流もちつき大会
2月	多国籍版卒業記念文集編集
3月	長岡高専スキー研修旅行参加

5. インターアクトとWSBの交流 —2011のスキー交流から始まった—

平成23年度、設立2年目のWSB例会で、他高専の学生サークルと交流したいという声が大きくなった。学生たちは他高専のホームページを調べて候補を挙げ、交流を呼びかける紹介メールを送付したが、残念ながら学生団体がなく、吉川が上述の4校を紹介して交流の開始を模索することとなった。長岡高専インターアクトクラブがちょうど3月8日～10日実施予定のスキー・スノーボード春季交流研修に、筆者の一人のインターアクト顧問の佐藤から誘われたことから、雪を見たことのない学生もいるWSBの学生の交流熱は急速に高まった。インターアクトの学生とメール交換をしながら、WSBの5名の学生が私費旅行（自費）として参加することとなった。

長岡高専インターアクトクラブの2011スキー交流研修に参加した沖縄高専WSBの学生の声を紹介する。学生は皆、以下のように交流の楽しさと友情を育めたことの意義を強調している。

「長岡高専のインターアクトさんの人の幅広さに驚きました。そのおかげで、楽しく交流させて頂きました。」

「今回のスキー研修では、長岡高専の学生や留学生の方とスキーをしたり、たくさん話をするのができ、とても楽しい時間が過ごせました」

「今後もさまざまな活動を通して、長岡高専のみなさんと交流を続けていきたいと思います。」

「今回の交流会をただ楽しんで終わりにするのではなく、いかに自分の、ひいては世界のために生かせるかを考えていきたいと思っています」

「長岡高専の学生の皆さんと交流し共にスキーができてとても楽しかったです。スキー初心者の私にとっては不安でいっぱいでしたがインストラクターや長岡高専の先生方、学生の方々は気さくで親切な方が多くいたのでのびのびと滑ることができました。」

「初めての人たちと初めてのスノボ、全く経験したことがない雪の世界に行くことは不安でしたが、とても楽しく充実した期間を過ごせたと思います。新しい友人もでき、行って良かったと思える最高のスキー旅行でした。」

この2011年のスキー研修旅行参加は、学生にとっては大きな転機となったようである。長岡高専の教職員はじめ、研修旅行の関係者の多様な人間像に触れたことによる。研修終了翌日の3月11日に東日本大震災に遭遇したWSB学生たちが無事に帰宅できたことには、長岡高専関係者の努力があった。沖縄高専の学生は、2011年3月12日の帰宅直前に、東日本大震災による原発事故の影響を受け、原発がメルトダウンする状況で、羽田から帰宅できなくなった。しかし、長岡高専関係者が全力で対応した結果、4日後の3月16日に新潟空港から無事沖縄に帰ることができた。沖縄高専の学生の一人からは、次のような感謝の言葉が寄せられた。「予期せぬ事態の際には迅速な対応をして頂きありがとうございました。今回のスキー交流会では本当に色々な事を学ぶことができました」



図-2 2012年3月スキー研修

この体験の報告はWSBの学生全員に共有され、翌平成23年度の春季交流研修にも3人が参加した。2012年のスキー交流研修参加者の声を以下に挙げておく。今回も交流の意義が強調されている。

「長岡以外にも他の学校の学生もくるので、本当に幅広い交流ができた」

「参加してなかったら絶対に関わらないであろう人達と交流でき楽しかった。人脈が増えた」

一方、長岡から沖縄への訪問も夏に実現した。2011年9月に3泊4日でインターアクトクラブの学生3人が顧問（佐藤公俊）とともに訪沖し、平和の礎など南部戦跡の見学やバーベキューを通じてWSB学生との交流を深めた。これにより、WSB学生の3月新潟訪問、長岡高専インターアクトクラブの9月沖縄訪問が、毎年恒例の地域間の相互交流行事となる可能性が高まり、2012年9月には留学生3人を含む長岡のインターアクター14名が沖縄を訪問した。

昨年と今年の研修に連続で参加した長岡の学生は以下のように、昨年と今年を対比して、昨年来を反省し今年の交流の深まりと充実ぶりを書いている。

「昨年はギリギリな日程と無理な交通手段を使った為、唯一できた交流時間は“車での移動”，そして帰る前日に一緒に泊まった“ペンション”，たったこれだけでした。でも正直移動はバラバラで全く交流することはあまりできず…。結局時間だけ経ってしまい、気がつけば帰る前日！話せばお互いの学校の話、文化の話、ガールズトーク…。話は盛り上がる一方、楽しさに時間をつい忘れてしまい、夜明けまでずっと語り合っていました（笑）短い時間で



図-1 2011年3月スキー研修

も、お互いを話してるうちに親しくなり、お別れには涙してしまいました。…

今回は違った！確かに涙のお別れはあったけど、初日目から最終日までずっと一緒に行動をしたおかげもあってか、会話も増え、ましてや年齢差も関係なくタメ語で話すような仲にもなれました。これは昨年に比べたら比べものにならないくらい、深くて良い絆が結べた交流会ができたと思います。この結果は今年度の春スキーの人数が増える気がします（笑）…

今回は一緒にいる時間が長いことで私生活についての文化や歴史について学べたり、三線を弾いたり一緒に歌ったり… 沖縄の文化や歴史について身近に触れることができました♪

沖縄高専の学生も交流の効果を述べている。

「今回の研修で、…先輩方から様々な話をさせていただいて自分の目標に向かう決意が少しだけ固まりました。」

6. インターアクトとWSBによる高専間交流を目的とした、平成24年度沖縄研修

2012年の長岡高専インターアクトクラブの沖縄研修は以下のような趣旨で参加者を募集した。沖縄研修旅行の招請文は次の通り。

長岡高専インターアクトクラブでは、下記のように、沖縄を会場にしてインターアクト交流会と高専間交流研修会を開きます。この会はIT特区でアジアやオセアニアのグローバルシティのネットワークのハブである沖縄におきまして、国際平和と国際交流を積極的に押し進めることのできる人材育成を目標として開かれるものです。

長岡高専インターアクトの日本人学生と留学生とが、那覇商業高校インターアクトと沖縄高専の国際交流委員会（World Student Bridge：WSB：ワサビ）の日本人学生と留学生と、那覇と沖縄高専で行われる交流研修に参加します。参加メンバー同士の地域文化交流・多文化交流による相互の啓発を目指して、多文化・国際交流と社会貢献の活動報告、意見交換、沖縄高専見学を行います。

こうした研修の趣旨に学生が賛同し、14名の学生

が参加し、共著者の佐藤が引率し羽賀が支援に参加した。Jetstarが2012年7月から成田-那覇便を就航させ、片道で1万円を切る価格で飛行機便を利用する事ができ、ローコストでの旅行が可能となったことも追い風となったことであろう。以下にインターアクト高専間交流沖縄研修旅行の内容を示す。

インターアクト高専間交流沖縄研修旅行計画

旅行日程：2012年9月11日（火）～15日（土）

4泊5日（+バス車内泊）

宿泊：真栄田岬のドミトリー・チュラマーチ

（美しい松）

目的：沖縄高専にて高専間交流研修会

（多文化・国際交流と社会貢献の活動報告）

IT津梁パーク見学

那覇の興南高校にてインターアクト交流会

本部（海洋博公園）、古宇利島方面見学、

南部戦跡見学など

意義：友情と平和への意識の形成と共有

この沖縄研修旅行に同行していただいた国際ロータリー第2560地区長岡ロータリークラブ会長高橋喜一氏から、国際ロータリー第2560地区ガバナー宛に、次のように今回の研修の成果報告があった。研修の主目的である、長岡高専インターアクトの沖縄高専WSB、及び、那覇のインターアクトとの交流という9月14日の行事が紹介され、交流の成果が高く評価されている。

「9月11日（火）～15日（土）までの4泊5日で、長岡高専インターアクトクラブ部員14名と顧問の佐藤公俊先生、地球ラボの羽賀亮介氏、第2560地区の



図-3 IT津梁パーク見学



図-4 インターアクト交流活動報告会（沖縄高専）

鈴木重彦ガバナーご夫妻，そして私の総勢18名で沖縄に行っていました。目的は，沖縄工業（高等）専門学校の学生と，また沖縄のインターアクトクラブの学生との交流のためです。…

14日（金）の午前，沖縄高専で『多文化交流を目的とした高専生の課外活動について』と題して話し合いがもたれました。それぞれの交流の経験などについて率直な意見が交わされました。お昼は学生の用意した食事を楽しみました。

また午後からは，日本とアジアを結ぶ架け橋，リゾート&ITの戦略拠点「沖縄IT津梁パーク」を見学しました。夕方からは，国際ロータリー第2580地区インターアクト年次大会反省会・第2560地区インターアクトとの交流会に参加し，首里高校，那覇高校，那覇商業高校，興南高校，昭和薬科大学付属高校のインターアクトとの皆さんと交流を行いました。

今回の交流旅行で，第2580地区石川正一ガバナーをはじめ，那覇RC，那覇西RCの皆さんに大変お世話になりました。



図-5 インターアクト交流会（那覇興南高校）

…生徒たちには非常によい経験となったと思います。私たちロータリークラブの支援が，若い世代の成長に大いに役立っていることを報告致します。」³⁾

この研修に参加したマレーシアからの留学生による以下の感想は，ウミガメの貴重な5mに比して研修の貴重な経験の鮮烈な印象を述べ，交流の充実を強調している。ジョーク等の表現も含めて日本人とは違った視点からのもので，このような視点を味わえるのも，やはり，異文化・多文化交流ならではの成果として興味のあることである（以下原文ママ）。

「“近所”君の車に乗って，沖縄美ら海水族館に行く途中で，長岡と違うお墓の形（自分の先祖のと似ている）をたくさん見たので，少し質問した。沖縄は仏教と言っても，実際琉球神道という宗教が多い。その宗教の一つの特長はマレーシアの中国系と同じ—自分の先祖を崇拝することだ。びっくりした！それに，もう一人の男（やっぱり私は名前を覚えるのが下手だ）が沖縄の建物の特長を話した。言わないと，私も気づかないかもしれないが，ほとんどの建物の屋上には水タンクがあること！よく見ると，なかなか面白い。昔沖縄では停水のことをよくあったから，水タンクを作り出した。実際，私の家にも水タンクがある。何となく，自分がマレーシアにいる気がした。」

「あのおじいさんが言った話に対して非常に印象が残った。その海に向かう5メートルがそれらのウミガメに対して，すごく貴重な経験だという話だ。同様に，私達に対して，この五日間の沖縄研修が非常に貴重な経験だと思う。沖縄高専のみんなとたくさんいい思い出を作ったから，来年また会いたい！！みんな長岡に来て！マレーシアおいで！！」



図-6 さよなら 元気でね ウミガメの赤ちゃん

「沖縄の人々はほとんど豚肉を食べるから、ちょっと残念で心配の気持ちが出て来ました。しかし、今回の沖縄研修は意外と大丈夫でした。私は皆さんからのあたたかい心使いを感じて、本当に感動しました。沖縄の食事は美味しかったです。ご飯チャンプルの作り方を学びたいです。それから、わざわざ遠い沖縄に行ったから私は沖縄方言を学びたいと思いました。沖縄高専の友達と互いに交流したおかげで、いくつかの言葉と文を学びました。例えば、『や！ぬそが。』は『何をしてるんですか』みたいな日常会話も学びました。面白かったです。この五日間は本当にいい思い出でした。また沖縄に行きたいな～と思いました。」

7. 相互理解・信頼による平和意識の形成と共有

以上のような学生間の相互理解・信頼の形成の場での多様な平和意識の形成と共有は、米軍基地を抱える沖縄と震災復興の地の長岡の間の地域間・国際間の異文化・多文化交流の主要な目的として留意してきたことである。昨2011年3月のスキー交流研修での沖縄高専の学生の感想に、交流の目的である平和意識の形成が言及されている。

「自然の家での交流会では『交流する』ということの意味や大切さについての話が印象に残っています。…交流ということに関してあまり深く考えた事がなく理解ができていなかったところがありました。しかし、それは平和のためにあるのだという話を聞いて納得しました。」

「『国家レベルでの平和ではなく、市民レベルで平和を築きたい』という目的と、その目的を達成せんとする行動のおかげで、今回の交流会は成功したと考えます」

長岡の留学生の今年の「ひめゆりの塔」と記念館の見学の感想でも、平和の意義が強調されている。

「第二次世界大戦記念館に行った。沖縄が第二次世界大戦最後の戦う場所だった。色々事を聞いて、文章を読んで、本当に感想がいっぱいあった。それはおばあさんから世界第二大戦の時、日本がマレーシアを支配していた時の話をたくさん聞いたからだ。

それに、マレーシアの歴史の本も様々な記事を書いてある。でも、私は戦争についてあまり分からないので、ここで意見を出したくない。ただ結論として、戦争でない時代で生まれた私達は本当に幸せだと思う。だから、今戦争の国を助けたい！みんなが幸せようになってほしい。」

沖縄高専の学生の感想では、日常の米軍基地に対する緊張感に基づく平和と静謐を志向する沖縄の意識があり、そうした意識があることへの本土の学生のとまどい、及び、両者の距離を自覚して沖縄戦を語り継いで、沖縄の人々の戦争に反対し平和に対する考え方を内地の人に伝えることの重要性が述べられている。

「沖縄の人にとって当たり前のことが、本土の人にとっては当たり前ではないことを多く知ることができた。今後、沖縄について伝えることがあるときには、今回の経験が役に立つだろうと強く感じた。特に印象的だったのが、沖縄戦に巻き込まれた学生の追体験をする施設「ひめゆりの塔」での沖縄・長岡の反応の違いだった。

沖縄戦での住民の被害を小中の平和学習と通じて知っていた私はひめゆりの塔を見学しても、あまり感傷に浸ることは無かったが初めて体験した長岡の方々は考えることが多くあったようだ。沖縄戦を通じて、沖縄の人々の平和に対する考え方を伝えることが出来ればさらに良い体験となっただろうと感じた。」



図-7 ひめゆりの塔への献花

8. まとめと今後の課題

以上に紹介した学生の感想から、多文化／異文化／多世代交流をとおした、学生の意欲／意識／価値／視野／世界の拡大を見て取ることができる。そして、相互に理解しての信頼関係の形成による平和意識の自覚と共有、および、学生の気づきや育ちという教育効果を確認することができる。

こうした活動への支援には多大な労力が必要でリスクがあるが、学生たちの成長を見るにつけ、また頑張ろうという力をもらえるし、やる気がわいてくる。ただし、リスクには何らかの対策を講じる必要がある。こうした活動の支援を行ってきて感じた課題を長岡高専の視点から述べ、最後に、リスクの削減について考察しよう。

このような課題としては、

1. 学生団体（部）活動を継続・持続させるための獲得したスキルを継承する仕組みづくりの必要性
2. 自主的な学生団体としての継続的な事業実施体制を構築する必要性
3. 学生団体（部）の行事实施に当たっての安全対策としてのリスク削減の仕組みの構築などがあげられる。

1の学生団体（部）活動の持続のための獲得したスキルを継承する仕組みについては、前年度部長が、新年度の副部長となり新部長を補佐し、新部長とこの前部長の副部長とが様々な行事プロジェクトの指揮を分担してクラブ運営のスキルの継承をはかる。さらに、この指導部の指導の下に、行事プロジェクトの企画と実行は部員がリーダーシップをとるという仕組みが考えられる。

2の自主的な学生団体としての継続的な事業実施体制を構築する必要性について、インターアクトが自主的に継続的な事業実施体制を構築し、支援者からある程度自立して活動できるようになることが今後の大きな課題である。意思決定の体制と透明性の確保や、協働体制および活動資金の確保の仕組みが必要である。

最後に、3の学生団体（部）の行事实施に当たっての安全対策について、一考して稿を閉じる。

上述のようにインターアクトの活動は、学内外で実施され、また、内外の地域の高専、高校、留学生と様々な背景を持つ学生が交流する。そのような複雑な背景を有する交流について、人命と人権、文化・慣習を尊重しての安全の確保が必要である。

リスクの低減が安全につながることは、安全の基

礎理念を示したGuide51という規格で「安全は、リスクを許容可能なレベルまで低減させることで達成される」⁴⁾と示されている。Guide51は主に工業用の規格であるが、人、財産、環境またそれらの組み合わせ事象も対象としており、学生団体（部）活動に対しても安全の指標として適用可能といえよう。

一例として長岡高専インターアクトクラブのスキー研修にこの考え方を適用して、リスク評価と対策立案を試みると、被害程度と発生頻度からリスクを評価して、検討すべきことは以下のことである。

- ・スキー、スノーボード滑走中の衝突、転倒による怪我。
- ・雪への飛び込みによる隠れた障害物との衝突。
- ・学生、引率間での連絡不備による、状況変化に対しての対応の遅れ。

これらリスクを軽減する対策は次のとおり、

- ・現状より多数の社会人による支援と協力体制の構築。
- ・堅実な連絡体制の構築。

以上のこと具体策として、インストラクターまたは現地の事情を理解している者が他地区の学生または留学生とパーティを組んで活動すること、及び、活動期間中の連絡が逐一行われる体制を造ることが望まれる。

長岡高専インターアクトクラブの学生は、現地や参加者の事情を理解して、積極的に他地区の学生や留学生とパーティを組んでいる。そうした方向性は、学生同士の交流を図りつつ安全性を高めるという点で望ましい。我々は、今後も十分な話し合いのもとに、運営方法を改善して活動を継続してゆけるよう、学生たちを支援してゆきたい。

参考文献

- 1) 吉川友子, 佐藤公俊:多文化交流を目的とした高専生の課外活動について,平成24年度全国高専教育フォーラム, <https://www.kosenforum.kosen-k.go.jp/entry/genko/00215.pdf>, 2012
- 2) 横田雅弘・白玉悟:留学生アドバイザー:学習・生活・心理をいかに支援するか,ナカニシヤ出版,2004
- 3) GOVERNOR'S MONTHLY LETTER (2012.10), 2012-2013 ROTARY INTERNATIONAL DISTRICT 2560, 2012
- 4) ISO/IEC Guide51:1999,Safety aspects - guideline for their inclusion in standards, 1999

(2012. 10. 3 受付)